

落穂を拾う

住谷悦治

熊谷守一画伯が「へたも絵のうち」という名言を唱えている。この流儀に従うと落穂も米のうちであり、食糧のうちである。刈り入れのあと、畑の中には可成りの落穂が残っている。その落穂ひろいという役目があつて、わたくしら農村に育った少年や少女は落穂拾いをさせられたものである。男の子は両手にいっぱいになるとそれを大きな籠に投げ入れた。女の子はそのころ常用していた「前かけ」を利用した。食糧の一部を補う「歴」とした食糧である。ミレーの名作に「落穂拾い」というフランス農村の光景はあまりにも有名である。中心的な食糧はすでに農業経営者、労働者とその主要の部分を実し終っている。ミレーの名画では婦人たちが、そろって落穂を拾っている光景で農民のうた声、話し声が聞こえるような気がする。落穂の米も米のうちであり、重要な食糧であるに違いない。食糧の価値として何ら差異差別のない平等の価値を有することは言うまでもない。同志社百年史の歴史とは別にその周辺には同志社学園史がある筈であり、学園史にも落穂といわれる部分は必ずあつて、全学園史が完成される助けとなるであらうと思う。わたくしは落穂

拾いの役目の一つを果したい。

いっぞや河野仁昭さんが、同志社学園の東門のところに「野崎昌子さんを偲ぶ——同志社東門前」という標識のあることをお見つけになった。見つかった以上、それを書いて作つた人が同志社にいる筈である。それは同志社百年の歴史など記録されるべき筈のものではないかも知れないが、その周辺のあるさやかな部分を構成するごく僅かな一部分であることは言うまでもない。

野崎昌子さんはあの東門の小さい受け付番をしていた当時四十がらみの親切なおばさんで皆の学生に好意をもたれ親しまれていたおばさんである。わたくしは大正十一年（一九二二）に同志社に職を得た一教員であるが、毎日のようにあの東門を通るとき、その受け付の窓に見えるごく人柄の好きそうなおばさんで必ずわたくしは「おはよう」とか「今日は」とか、夕方帰るころならその受付の窓にいるおばさんに「さよなら」と声をかけ合つたものである。大正十一年いらしい、殆んど毎日のように挨拶を交わしてきたつかしいおばさんである。「野崎のおばさん」と言われて同志社の教職員も、あの東門を通る学生たち

も、みんな好意をもって挨拶をして通りすぎるのであった。わたくしは大正十一年から昭和八年に同志社を退職して京都を離れるまで、この野崎のおばさんに声をかけていた。受け付けに見るこのおばさんはしばしば学生たち、学校宛てに来た手紙を呼びとめて宛名の学生に渡していた。もちろんとくにおばさんと同じ学生のみのものであるが、学生のあるものは、ラブレターをこのおばさんかへ渡された。おばさんはニコニコして「モシモシ××さん」とそのとくに知り合いの親しい学生に渡したものである。昭和八年の夏にわたくしは同志社を退いてから、もちろん野崎のおばさんに逢えなかった。

戦後わたくしは再び同志社に還り、思いがけなくも総長に選挙され、庶務部長の生島吉造さんとは本部で普通学内での親交をつづけるようになった。その二度目に同志社に来たときは東門受けに野崎のおばさんの姿は見えなかった。退職したのか或は亡くなったのか知らなかった。わたくしは本部へ出勤することになったのであるが、生島部長とある時野崎のおばさんの話をした。その時、東門の入口右側に野崎昌子さんを記念するために

一つ小さい石の標識を建てようではないか、という話をした。こういうことはたぶん生島さんの発議であったと思う。何年の何月のどこか全然記憶はないが積極的な生島さんほどこからか恰好の石を探し出して来て、これを野崎さんの思い出の標識にしようではないか、と話し合った。このようなことは別に本部理事会にかけることなどする必要もなく、またそのようなことは考えてみたこともなく、生島さんと二人だけの話して実現してしまった。野崎昌子さんという名を留めればいいのだけれど、それには「同志社東門跡」という名義で建てて、その背面に記念として「野崎昌子さんを偲ぶ」と書きこもう。同志社と学生大衆に親しみをたれたおばさんの名を記念としようということで、どこからか生島さんが探し求めて来た手頃の石(値、二円とか三円とか)にわたくしが現職だから表に口実として「同志社東門跡」と書き、背面にただ「野崎昌子さんを偲ぶ」と書き記るそう、ということに話はまとまり、生島さんは私に「揮毫しなさいよ」と念を押した。わたくしは承知して何枚も何枚も下書きをした。堅い字でまっぴいけれどともかく、彫り込む前

にわたくしは十数枚も書き更えて生島さんが、それを石屋さんへ渡して、現存する自然のままの丸石の標識をつくった。その石工は生島さんの親しい東山五条角の、校友で芸術家で石工をしていらっしやる沢田東一郎さん(通称「石匠沢吉」さん)につくっていただいた。沢田さんはその辺の事情をよくご存じであらうし、よき証人である。何年のことかわたくしは忘れてしまったけれど沢吉さんは或は職業柄、記録されているかもしれない。

このようなわけで、野崎昌子さんの記念標識は、生島吉造さんと「沢吉さん」とわたくしの三人、合作の記念碑である。そのころはこのようなことは、本部の生島さんやわたくしが主唱すれば学内で何の抵抗もなくアッサリと片づいたものであった。

最近、河野仁昭さんがこの記念の標識の石を一つの謎としてお探りあげになったのを幸い、やはり一つの小さい記録として、現在、生島さんはご他界されたが、校友の沢田東一郎さんと私とが存命なので、ここにその真相を書きとめ、河野仁昭さんの御発見の標識の裏づけとして一言、残して置きたいと思う。

(前同志社総長・大学名誉教授)

ある若い国際人の生と死

— 山根 真君を偲んで —

麻 田 貞 雄

今年の二月十六日、法学部研究科（博士課程後期）の山根真君が台湾で留学・研究中に心臓病のため急死した。弟子というよりも良き共同研究者、気のおけない相談相手、学問上の同僚、国際会議における助手役、つまり私の力強い片腕を失ってしまった悲しさは、半年近くたった今日でも、あまりにも深く、追悼のことばを記すのは苦痛である。

とりあえず、山根君の略歴を記しておく。もともとアメリカ史専攻の彼は、一九七五年四月に法学部修士課程（政治学専攻）に進学、私の指導のもとにアメリカ外交史のほかに広く近代国際政治史を研究。その間、苦学しつつ中国語、韓国語の修得に努力、七八年三月、国際的に価値ある立派なマスター論文を完成して一番の成績で修士課程を修了。引き続き博士課程に進み、昨年八月から一年間の予定で台湾の国立師範大学に留学、幅広く精力的に中国現代史の研究を進めていた。自分の体力と気力のすべてを仕事に打ち込み、その無理がたたって二八歳の若さで亡くなった彼は、学問と国際親善のために志半ばにして倒れた「殉職者」なのだ、と私には思えてならない。そして、一大学院生の死が（後掲の

文章の示すように）、これほどまでに国を越えた広い反響を呼ぶことなるうとは、指導教授の私も到底予想していなかった。

われわれの誇りとする山根君急死の打撃からひとまず回復するや、彼と同級の院生諸君が私の研究室に集ったが、山根君の遺志を守っていくために「追悼論文集」を是非発行したいという熱望が一同から表明された。そこには、故人のこれまでの研究成果や苦勞して収集した貴重な外国の資料を永く残し、一般の研究者にも役立つような学術出版物にとどまらず、国際人としての山根君の人間像を多方面から描き出し、関係者の思い出の糧としたいとの願いがこめられている。そして今後、「山根真君の精神」を後輩たちに語り継ぎ、彼らにふるいたたせる一助になれば、と念願する次第である。

この「追悼論文集」は、私の「追悼のことば」と「山根君略歴」にはじまり、同君の遺稿「ローズヴェルト政権のインドシナ政策」（『同志社法学』一六〇号にも掲載）、同君収集の研究資料、山根君よりの書簡（彼は実に筆まめであった）等を本体とし、それに院生同志諸君の論文数篇、山根君に大変世話にな

つたイギリスやアメリカの若手研究者の論稿（英文で印刷）を加え、そして最後に「回想編」を付し、日本は勿論のこと、台湾、韓国、英米における彼の恩師や友人など、多数の方々から感動的な玉稿をいただいている。ここでは、その代表的な三篇を抜粋して、全同志社人に紹介しておこう。

（尚、上記の「追悼論文集」は、御遺族の援助を得て、院生同級生・友人達が全く採算を度外視して編集を進めており、すでに本計画を耳にした法学部の諸先生方から「貧者の一灯」を寄せたいという声も出ている。この趣旨に御賛同いただければ、学内・学外の読者諸氏にも御高志を麻田研究室宛にお寄せいただくたく、この紙面を借りて要請したい。）

一九八〇年七月十日記

（大学法学部教授）



故 山根 真君

I、台北YWCA日本語クラスの教え子一同より

拜啓

私達は台北のYWCAで山根先生にお教えを戴いた学生達で御座居ます。

山根先生がお亡くなりになられてから、早くも一ヶ月が過ぎましたが、「中略」私達の脳裡にも御在世中の先生のお姿がいまだに深く焼きついておりまして、哀惜の情、一入深いものが御座居ます。

私達一同も、あの殯儀館での納棺式に参列し、先生の御遺体とお別れ致しましたが、その時のまことに安らかなお顔を想い起こす度に、あの温情に溢れた在りし日の御容姿が惚げれ、その先生がご昇天なされたとはとても信じられない、信じたくない気持ちでいっぱい御座居ます。

例えば、山根先生がYWCAで私達を教えて下さるようになりましたのは、私達にとってはまさに千載一遇の、またとない得がたい出会いで御座居ました。先生が当地で私達を指導して下さった時の学識の広さと深さ、忍耐力、真面目さ等、先生のお体から溢れ出る学識と人格の豊かさは、それ

まで私達の接してきた日本人に対する浅薄な先入観を一変させました。先生は台湾の若者達に新しい立派な日本人像を知らせて下さった方と言えるでしょう。

山根先生は天国の神様のお膝元にお帰りになっても、神様から特別にお可愛いがられるなる事でしょう。私達はいつもそう思っ自分自身に言い聞かせるよりほかに方法が御座居ません。

どうぞ神様からのお慰めによって日と共に皆様のお悲しみが多少とも薄らぎますよう、そして皆様方が御健勝であられますよう、心からお祈りしております。

まことに不行き届きな文章ですが、以上をもってお慰めのお便りと致します。敬具

一九八〇年三月十六日

山根先生御尊父様御家族御一同様

台北YWCA会話組と応用組学生一同
郭淑嬌（他一七人連名、御氏名省略）

II、葉達雄先生（故人の中国語の先生）より

新年後、私が台北にもどって間もなく、山根さんの友達から電話で彼が亡くなった事を聞き、非常に衝撃にうたれ、この信じ

る事の出来ない事実に対して私は何も言うことが出来ませんでした。

私が出根さんと知りあったのは、一昨年の夏、東海書店で金先生に紹介してもらってからです。その時、彼は台湾へ行き、資料蒐集かたがた、中国語をもマスターしたといわれ、其後約一年間私と一緒に中国語を勉強してきました。この間、私も彼からよく日本語を教えられました。

山根さんは、日本人ですけれども、友達に対しての親切と「好客」という点では、中国人と同じ性格を持っていました。

彼の専攻は私と分野が完全にちがいが、彼は国際関係で、私は中国古代史です。しかし、私達は所謂「天南地北」広く意見をかわしました。今その情景を思うたびに、彼が若くして亡くなったことを遺憾に思い、且つこれが学界の損失であることを信じて止まない次第です。

六月十一日 葉達雄（台北にて）

III、朴憲郁先生（故人の韓国語の先生）より
私が一九七六年一月より京都の西院にある在日大韓キリスト教京都教会で働きなが

ら、それに所属する京都信明学校（韓国の歴史、文化、言葉を教える各種学校）で教えていた時に、韓国語を学びに来られていた山根さんと知り合いになりました。山根さんはそのころかなり韓国語の力を上げていました。「中略」

彼はアメリカ人や台湾人の方々と交流があったようです。彼は国際政治学の方面を本格的に研究しようとしていたという印象が私には強く残っています。その方面に私も関心がありましたので、いろいろ伺い尋ねることがありましたが、とても熱心に説明して下さい、多くのことを学びました。ひかえ目で少しはにかむようであつて、しかもまじめで好感のもてる人でした。「中略」彼は国際政治学を知的に深く広めつつも、同時に国際的感覚と生活態度を自然に身につけていたように思います。彼はそのひかえ目な性格に反して、否、そのひかえ目な性格のもつやさしさの故に、包摂的であり、日本的次元をいつでも脱皮して他の民族と手をとり合える資質を豊かに備えていたように思います。「中略」
同じ心臓の病気で急に命を断つたこと

思い起こすのは、数日前この世を去った故大平首相のことです。彼は政治的混沌の日本及び世界の渦中であつてなすべきことが多くあったにちがいないのですが、彼の死はいわば七〇年の歳月をほぼ生き抜いた人生の終局近くの死であります。これに対して、若かつた山根真さんの場合は、人生の限らない将来の可能性を旨ざす確固とした土台を築きつあつた矢先の死別ですの、何とも言えない無念さと悲しみが、ひときわ胸に突き上げるものを禁じ得ません。

しかし、人生はどれだけ長く生きたかという年数によって評価されてはならないと思います。山根真さんは人生の半分も生きながらえなかつたにもかかわらず、その短い人生の中で精一杯生き抜き、学問的業績を残し、そのすばらしい生き方を、御遺族をはじめ彼に接した多くの恩師や友人に、それこそ国際的広がりの中で深く長く与えて下さつたのであり、今後も与え続けるであらうと信ずるのです。「下略」

一九八〇年六月十八日記

在日韓キリスト教岡山教会

牧師・朴憲郁